

## 針江水ごよみのうれしい波紋

針江水ごよみの取材で新旭町にうかがったのは、2004年の1月。その際には、かばたのことも川掃除のことも、あまり興味がない感じで「なんでそんなことを聞くのだ？」といった風の役員さんたちだったが、半年後の今回、対応が一変したことに大いに驚かされた。

5月に「針江生水の郷委員会」が発足し、NPO法人を目指して活動中というのだ。

### 「針江生水の郷委員会」

もちろんカレンダーだけが、「針江生水の郷委員会」発足の原動力になったわけではない。滋賀県大津市在住のカメラマン、今森光彦さんが監修したNHKドキュメンタリー番組が、1月にハイビジョン放送、4月に総合テレビで放送されたことで、生水の郷、針江が注目を集めたのだ。

観光客が全国から訪れ、受け入れ態勢を取らざるを得なくなり、観光協会が窓口になって第2、4土曜日にツアーを始めたところ、5回で120名強の参加者があった。観光協会を通さず、平日に訪れる人を入れると400名を越す人が訪れたという。

「初め心配していたことは、2つありました。一つは治安の問題。もう一つは、ゴミ問題です。しかし、今のところそれは杞憂で、治安の悪化はないし、ゴミを捨てていくような人はいません。かえって、草抜きをしたり、道にゴミが落ちていないように気を配るなど、住民の意識が高まってきました」

と副会長の美濃部さん。

「僕らはみんな、子供のころはフリチンで川遊びをした世代。川でおしっこをしたらおチンチンが腫れる、と年寄りから言われたり、川を大切にする気持ちは小さいころから育まれていました。ところが昭和50年代に入ってからヘドロが川底に溜まるようになり、水が濁ってきました。子供たちが川遊びをしなくなったのは、そのころからです」

こんなに美しい針江の川も、高度経済成長期には、このような汚染があったことを初めてうかがった。子供たちが遊ばなくなったのは、危険だからとか、塾通いが忙しいからといったライフスタイルの変化からだ、勝手に思っていたのだが、実際には違っていたのだ。

水と文化研究会が針江地区でお手伝いしている「水の学校」では、2003年3月に子

ども水フォーラムでアフリカの子供から「こんなきれいな水を流してしまってもったいない」と言われたとき、目をきょとんとしていたという。水が湧き出て流れていき、その先で琵琶湖にたどり着き、京都の人ののどを潤すことは、自然の摂理として生きてきたからだ。

「針江生水の郷委員会」の大人にしても、水はいつも当たり前であって、有り難さがわからなかったという。それを今森さんやカレンダーに指摘され、感謝して受け入れているところなのだ。

## 農業用水と生活用水の管理が一本化

前回の WORKING PAPER で報告した際に、

「近年問題になっているのは、農業用水路の掃除。川掃除は農業従事者だけでなくすべての家庭から参加するが、農業用水路の場合は農家のみ。これも一家から一人の供出だが、大規模農家が増えたことで農家の戸数が減り、参加する人数が減っているそう。必然的に一人ひとりの負担が増え、今後の維持管理に支障をきたす恐れもあるという」

と書いたが、7月24日に訪問した際に、

「農業用水路の清掃に、一般住民も参加するようになった」

という報告があった。

農業用水路に限らず、一般河川の川掃除も、住民が地域資源である川を自己管理しながら守るシステム。翌日の25日はたまたま川掃除の日に当たったが、どの家からもさりげなく人足が登場し、作業に参加していった。腿まである長いゴム長靴は、川掃除の必需品。おしゃれな釣り用の外国製のゴム長靴を履く人もいて、針江ならではのファッションを見せてくれる。

住民に話を聞くと、やはり高齢化して人足を供出できない家も当然増えているという。都会に住む子供たちが、わざわざこのために帰ってくるということもないそうだ。しかし、川掃除ができなくても、川べりで話をしたりするコミュニケーションは大切にされている。権利や利権（と書いて、権利が利権をひっくり返した言葉だと気づく。閑話休題）に関係なく、地元の資源を大切に守りながら使う、という意識が、このコミュニティを健全に維持している秘訣なのだと感心する。

## 「針江生水の郷委員会」の今後

委員会が発足したからといって、針江地区ではこれを観光の目玉にして稼ごうという気持ちは毛頭ない。針江では自然環境が、イコール生活実態の場だからだ。しかし地元で誇りを持てるものを、外部の人にも楽しんでもらおうというホスピタリティがあり、ついでにちょっと自慢したいという気持ちもある。将来は NPO 法人にして、専任の職員が対応できれば、とも思っている。

しかしその反面、「使いながら守る」と言いながら、使えば必ず汚れることは明白だから、本当に使い続けていいのかという迷いもある、と言っていた。一躍、針江のスターになった田中三五郎さんのお宅には、訪問客が途切れず、それも心配の種だ。

「訪ねてくれると、むげにもできず、つい相手をして疲れてしまう。生活習慣も乱されるし、かばたの鯉が暴れるようになったらしい」

このような心からの正直な声、そして住民それぞれが持つ意見をどのようにまとめていくか、「針江生水の郷委員会」はこれからの進む方向を模索して奮闘中である。